

妹尾住田遺跡現地説明会資料

岡山市教育委員会

妹尾住田遺跡の発掘調査は、市営住宅の建て替えにともない、今年の7月19日よりおこなってきました。調査面積は1,200 m²です。その結果、平安時代中頃(10世紀)から鎌倉時代後半(14世紀)にかけての建物の柱穴や土壌(ゴミ穴 etc)が多数みつかり、この遺跡が妹尾の中心地の1つであったことが予想されます。

調査の概要

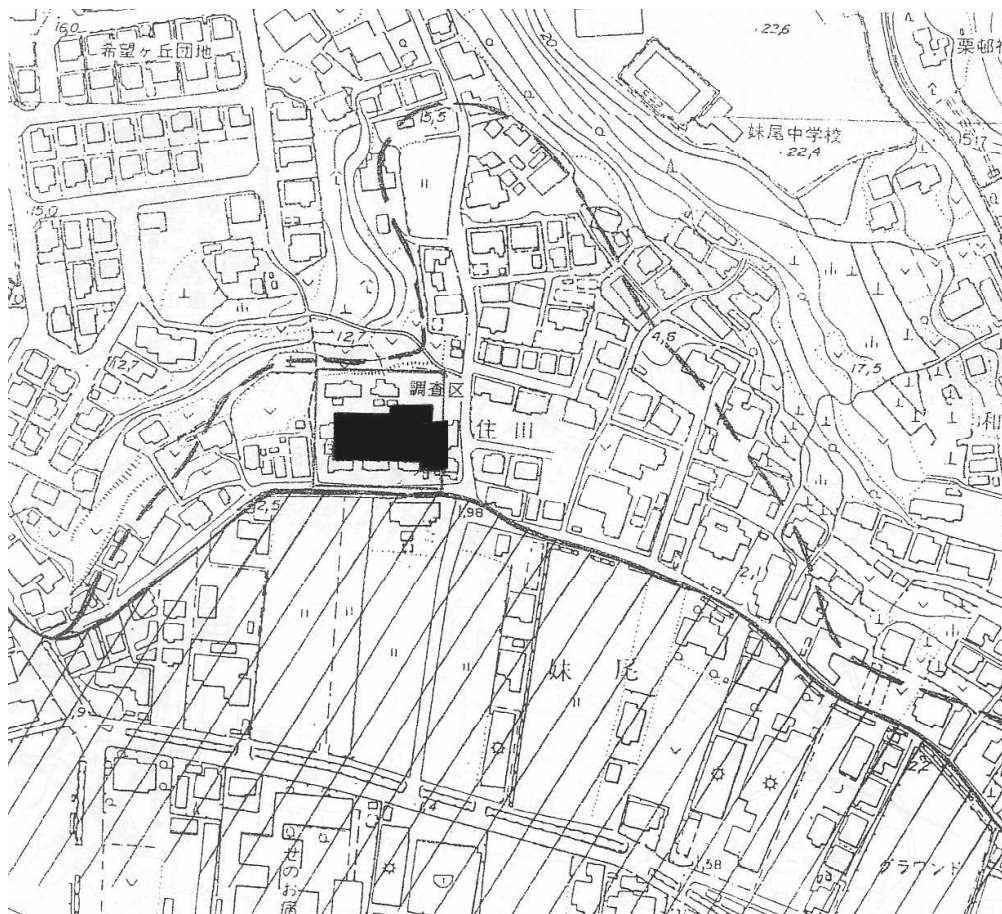
平安時代中頃については、規則的な建物配置をなすことや、礎石を用いた建物が存在していた可能性も高いことと、出土遺物も当時の最高級の食器である青磁・緑釉陶器・灰釉陶器などが極めて多く含まれていることから、一般的な集落ではなく公的な性格のかなり強い遺跡であると思われます。さらに、銅鏡や銅椀なども出土しており、都風の生活が行われていたこともうかがわれます。平安時代末(12世紀後半)から鎌倉時代(13・14世紀)にかけても多くの柱穴や遺物が出土していますが、様相としては一般的な集落に近かったと思われます。鎌倉時代以降はこの地に集落が形成された痕跡は認められませんでした。

まとめ

妹尾(瀬尾)が文献上に出てくるのは鎌倉時代以降ですが、今回の調査により、それ以前の平安時代中頃から特別な遺跡が形成されていたことが明らかとなりました。

妹尾は備中国のなかでは最も南へ突出しており、当時の最重要航路であった瀬戸内海へ直結するという地理的条件を備えています。平安時代に入ると山陽道を用いた陸路から、大量輸送を可能にする海路への転換がおこなわれており、妹尾住田遺跡の出現もそれに起因していると思われます。つまり、妹尾住田遺跡は備中国の南の拠点であったといえます。

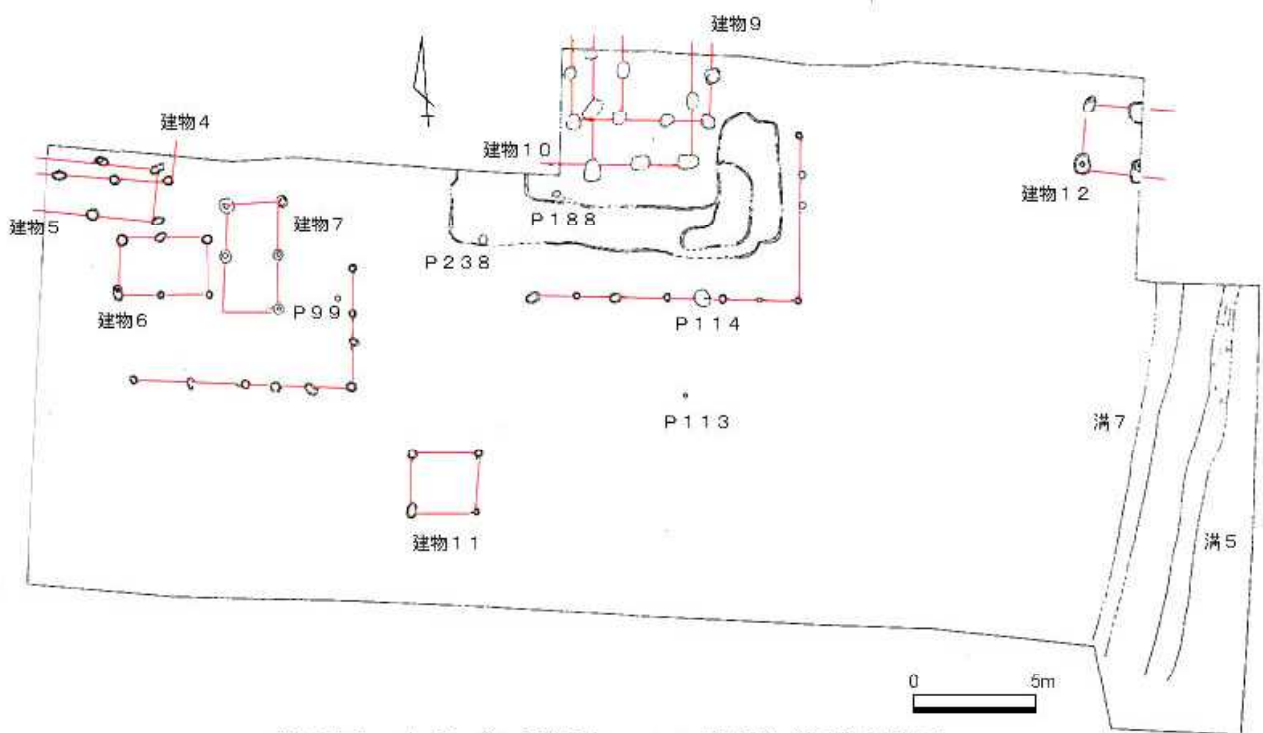
このことが、瀬戸内海航路の重要性がさらに増大する中世以降、平氏の有力武将である瀬尾(妹尾)太郎兼康の拠点とされ、文献上ででてくるようになった理由であると考えられます。



調査区の位置



第 2 図 遺構全体図



第 3 図 古代（9世紀末～10世紀）遺構全体図

中世以前の「妹尾」関連文献及び史料

1 吾妻鑑 第四 元禄二年(1185) 四月廿九日条

(前略) 今日、以二備中国妹尾郷一、被レ付二崇徳院法華堂一、是為二没官領一、武衛所下令二拝領一給上也、仍為レ奉レ資二彼御菩提一、被レ宛二衆僧供料一云々、

2 備前国一宮社法 本社文書

備中国中大小神祇...

(中略)

一 備中せのう両うら村之あき人、右之ことく、悉く備せんの一宮へ諸初尾参り候、并御へん、御さい浦役、はまやくとて、春八ひらノウほ卅三こん、同たいノウほ卅三こん、秋八しほたい百廿まい、又おかずの物とて、小肴百八十参り候、

右ノ諸はつほ、神主、祝部、借屋此三殿ノ家より被仰付候て、それぞれ下奉行参り候、

備前國中村々在々ノ宮、かみかみ御祭りに付而、一宮より御存じの事、但むかしは大キ成るやうに申候、先々是は近年ノおほへを社人衆かき付申候なり、

(中略)

一 備中の内せのふ両うらより春秋二、鯛のうほ百卅かけ ひらのうほ百廿まい、はまくり、はいがい、白うほまいり候、いそさかな御へんとて色々子細、是備前ノ内へあきない仕候付而、其はつほの心也、むかしの如此候、ふごやく、人役、馬やく二諸初尾いたし申候、

(中略)

康永元年六月二十八日

(後略)

吉備津彦神社史料

3 足利尊氏安堵状 山城阿野文書

備中国妹尾庄和田方領家職半分事、任親父公廉朝臣讓状、可被知行之状如件、

康永四年七月廿日

尊氏(花押)

阿野中将殿

阿野文書

4 守安 備中 元応(1319~1321)

「備州妹尾住守安」 刀匠全集古刀編

5 平家物語 長門本巻四

たんはの少将(藤原成経)は、備中のくにせのおのみなと、ゆく井といふ所より御船にめして、浪ちはるかにこきかよふ、